

息子介護に見るケア経験のジェンダー非対称性

平山 亮

(東京都健康長寿医療センター研究所 福祉と生活ケア研究チーム 研究員)

配偶者の有無や就労状況にかかわらず、親の介護の担い手となる男性、すなわち息子介護者が増えている。本稿では息子介護者による状況の見方や、周囲の人々による息子介護者の見方に焦点を当て、男性性(「男とはどのようなものか」という理解)がそこでいかに参照されているかを考察した。男性性(と女性性)の参照のされ方は、息子介護者の家事の遂行に対する自己評価や、母親と父親への関わり方、および、周囲の人々による息子介護者への態度の違いを説明する一方、そこで用いられる男性性(と女性性)は性別分業構造を前提としたものであり、彼らの解釈実践を通して、息子介護のただなかで既存の構造が再生産される可能性も示唆された。

家族介護の担い手における変化の一つとして、男性介護者の増加を挙げることに異論を唱える人は少ないだろう。家族介護者の過半数はいまだに女性だが、後で具体的に見るように、男性の家族に介護される高齢者は現在決してわずかとは言えなくなっている。

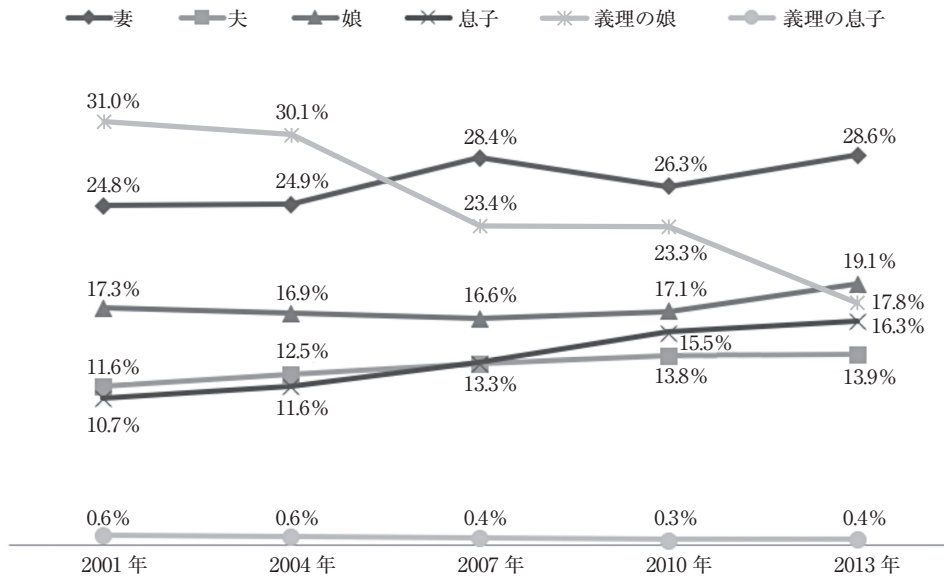
男性による家族介護のなかでも、働き盛り世代の息子が親を介護するケースの増加は、日本ではとりわけ大きな変化として感じられるに違いない。周知の通り日本の家族介護の担い手は、これまで主に息子の妻だったからである。義理の子ではなく実の子、しかも、性別分業構造のもとでは家族へのケアの担い手になることを最も期待されそうにない働き盛り世代の息子が主たる介護者になることは、日本の「伝統」からは特に逸れた家族介護として見なされるだろう¹⁾。

本稿の主題は、この息子介護である。本稿では特に、息子介護者の状況認識や、周囲の人々による彼らへの評価に、男性性がいかに作用しているかを分析する。

ここでの男性性とは、「男性とはどのようなものか」という理解のことである。この理解は、個人としての男性のふるまいを評価する際の基準としても用いられるので、男性についての単なる記述(「男性はこのようなものだ」)を超えた規範的な信念(「男性はふつうこのようなものであるべきだ」)でもある。本稿が関心を寄せるのは、「男性とはどのようなもの(であるべき)か」という理解が、息子介護者による状況の見方、および、周囲の人々による息子介護者への見方にどのように影響するのか、という点である。

一般的に男性性は、介護する男性に困難をもたらす要因として見なされる。例えば、男性介護者の孤立のしやすさの原因を、男らしさの規範に求める説明を思い出してみればよい。男性は自律し自立した存在でなければならない、という行動規範に囚われているがゆえに、慣れない介護に取り組むときにも周囲に助けを求めることができず孤立を深めていく、という説明は、学術領域のみならずメディアにおいても頻繁に登場する言説である。

図表-1 同居の主たる家族介護者——各続柄の割合と変化



出所: 厚生労働省『国民生活基礎調査』より筆者作成

だが、フェミニスト老年学者のトニ・カラサンティが指摘するように、男性性は介護する男性の足枷となることもあれば、逆に心理的報酬をもたらすこともある (Calasanti 2003)。言い換えれば、男性介護者は男性性から、女性には望めないアドバンテージを引き出すことも可能だということである。だとすれば、男性性が男性介護者にいかに困難をもたらしているか、という問いは、彼らの経験についての理解の範囲をあらかじめ狭めてしまうという意味で問題含みである。だからこそカラサンティは、男性介護者の経験を理解する上で重要なのは、「介護をめぐるさまざまな場面において、どのような男性性がどのように参照されているか」という問いだと説く。

本稿は、カラサンティと同様の立場から、息子介護者と周囲の人々による男性性の参照のしかたを検討する。本稿ではまず、日本の息子介護者のプロフィールを確認する。息子介護者が、現在の日本の家族介護者のなかでどの程度の割合を占めるのか、また、息子介護者とされる男性はどのような婚姻・就労状況にあるのかを、調査データをもとに概観する。その上で、息子介護者や周囲の

人々による状況認識のしかたのなかで、どのような男性性が・どのように参照されているかを、私自身が行ったインタビュー調査を主に用いて考察する。息子介護者による状況認識については、自分自身の介護のしかた、とりわけ男性介護者にとって不得手とされる家事の遂行 (performance) と、被介護者である親の状態に対する見方を取り上げる。周囲の人々については、それらの人々が息子介護者をどのように評価しているかを考える。

1. 息子介護者とはどのような男性か

日本では、息子が主たる介護者を務めるケースは、家族介護のなかでどの程度の割合を占めているのだろうか。図表-1は、『国民生活基礎調査』(厚生労働省)をもとに、要介護高齢者とその主介護者が同居している場合について、続柄別にその割合を示したものである。介護保険制度が施行された翌年(2001年)では、最も多かったのは義理の娘(31.0%)であり、息子の割合(10.7%)は義理の息子(0.6%)に次いで最も少なかった。しかし、その後10余年の間に各続柄の割合は大きく変化し

た。義理の娘の割合は大きく減少し、他方、実子である娘と息子の割合は増え続け、娘（19.1%）、義理の娘（17.8%）、息子（16.3%）の違いは今や僅差である。なお、このデータは同居介護に限ったものだが、『平成28年（2016年）版高齢社会白書』（内閣府）によれば、日本では主介護者が同居している場合が過半数を占めており、別居介護を加えたとしても上の割合が激変することはないと考えられる。むしろ、子世代介護者の割合は増えるだろう。2013年に最も多い同居の介護者は妻だが、別居の場合でも配偶者が主介護者になるという可能性は低く、別居介護には配偶者よりも子どもが目立つと考えられるからだ。

こうした息子介護者の増加の要因として、単身男性の増加がしばしば指摘される。これまで介護の担い手が義理の娘だったため、そもそも義理の娘がいない（単身の息子しかいない）親は息子に頼らざるをえず、それが息子介護者の割合を増やしている、という説である。

だが、既存のデータによると息子介護者は必ずしも単身者ばかりではない。例えば、全国国民健康保険診療施設協議会（2012）が行った全国調査では、男性の「老親介護者」の50.0%は既婚者だった。この「老親介護者」には義理の親を介護している男性も13.3%含まれているので、全員が実の親を介護しているわけではない。だが、それを割り引いてみても、息子介護者が単身者に偏っているとは思えない。むしろ、ここで示唆されているのは、既婚者も単身者も同じ程度いる可能性である。

もう一つ、息子介護者の増加の要因としては、非正規雇用や無職の男性の増加が語られることもある。これは、「処遇困難事例」として取り上げられた、その意味では注意を引く息子介護者のなかに、安定収入が得られずに実家で暮らす壮年男性が多いためである（春日 2013）。たしかに、若い世代の雇用状況の不安定化は自活の難しい男性を増やし、親元にいるうちに崩壊的に介護者となる息子の増加に繋がってはいる。だが、そうした男性ばかりが息子介護者になるというのには疑問の余地がある。

例えば、同じく全国国民健康保険診療施設協議会が行った別の調査（2011）によれば、息子介護者の介護前の就労状況として最も多かったのは「正社員・正職員」で42.9%だった。逆に、介護前に「パート・アルバイト、契約社員など」「無職」だったのは、それぞれ9.6%、14.7%だった。対象者である65歳以下の全国平均と比べて非正規雇用や無職の割合が多いものの、最も多いカテゴリが「正社員・正職員」であることからすると、安定した仕事がない男性ばかりが息子介護者になっているとは考えにくい。

要するに息子介護者は、単身や非正規雇用・無職といった特定の属性の男性に偏っているわけではない。逆に、結婚していたり雇用が安定していたりする息子でも、親の介護者になる可能性は十分あることが、これらの調査からは示唆されている。働き盛りの既婚の息子という、以前であれば親の介護者に最もなりにくそうな男性でさえその役割から「逃れる」ことができなくなりつつあるのは、人口構造の変化により、これまでの老親扶養の慣行（＝長男の妻が親の介護役割を担う）が不可能になっているからである（落合 2004）。娘が舅姑の介護を行い、自分の親の介護は兄弟の妻に託すという慣行は、どちらの側にもきょうだいが多くいる場合にしか成り立たず、少子化が進むなかで高齢者が自分の娘をその夫の親の介護に専念させることは、自身の介護を頼める子どもがいなくなるリスクをはらんでいる。家族介護者の続柄別割合の変化は、どの家も子どもの数が限られているという状況における、実子介護の趨勢によるものである。

ちなみに、息子介護者の増加に対して、男性の意識の変化という要因はそれほど貢献していないかもしれない。というのも、妻ではなく自分自身で親を介護する意向をもつ男性は、あまり増えていないことが示唆されているからである。

例えば、若年世代の介護意識を調査した中西泰子（2009）は、単身の男性よりも既婚の男性の方が「親を介護するつもりがある」と答えるという結果を報告している。中西は調査を通して、若い男性ですら親の介護を妻に「手伝って」もらうこ

とを前提に介護を考えている可能性を指摘する。なお、中西による研究知見は、私自身が面接調査を行った息子介護者の語りとも符合する。インタビューのなかで「まさか自分が親を介護することになるとは思わなかった」と発言したのは既婚よりも単身の息子介護者に多く、また、彼らが介護役割を予期していなかった理由として語ったのは「嫁のいない自分のところに介護がまわってくるとは思わなかったから」というものだった（平山2014）。

男性の意識の変化はともかく、人口構造の変化によって実子介護が標準となりつつあることが、息子介護の割合を押し上げている。繰り返しになるが、息子が介護者になるかどうか、配偶者の有無や就労状況の違いが及ぼす影響は限定的だろう。むしろ、そうした属性にかかわらず男性が親の介護者にならざるをえないようになったからこそ、息子介護は増え続けているのだといえるだろう。

2. 息子介護者の見方①——家事の自己評価

息子介護者の増加とともに、彼らが直面する困難が取り上げられることも多くなった。しかし、冒頭でも述べたように、息子介護者は男性ゆえのアドバンテージも得られるのであり、カラサントーによれば、その鍵になるのは、彼らが状況認識のなかで男性性をいかに参照するかである（Calasanti 2003）。ここではそれを具体的に検討するため、自分の家事の遂行に対する息子介護者の認識（自己評価）を取り上げる。データとして用いるのは、私が行った面接調査から得られた息子介護者の語りである²⁾。

家事の遂行は、息子介護者が直面する困難の一つとしてしばしば指摘される。例えば、親と同居する単身男性の場合、家事の一切を母親に頼ってきた者も少なくない。その母親が要介護状態になることで、母親の世話どころか自分自身の生活を維持することすらおぼつかなくなることもある。全国国民健康保険診療施設協議会（2011）の調査でも、息子介護者の多くが家事に問題を抱えていること、とりわけ、炊事の経験と能力の不足のた

めに、彼らに介護される親まで必要な食事をとれないことがしばしばあると報告されている。

一般的には「問題」と見なされる家事能力の不足だが、息子介護者自身はそれをどのように見ているのだろうか。

まず、男性はふつう家事が得意でないという認識は、調査に参加した息子介護者のほぼ全員に共有されていた。自分自身がそのふつうに当てはまる場合はもちろん、自分は家事がそれほど苦手ではないという息子も、男性一般の特徴として家事能力不足に言及していた。

今の日本の社会ではですね、やっぱり女の人がシフトして、家のなかを結構やっているケースが多いじゃないですか。だから、平均的にはね、（男性に）そういう能力なり知識なりがないっていうのはありますよね。

男性はふつう家事が得意でないという認識は、男性とはどのようなものかという理解に属するという意味で、男性性の一つである。この男性性をどのように用いるかによって、自分自身、家事が得意でないという息子介護者による状況の見方に違いが生じていた。

彼らのなかには、介護がままならないことを自分が男であることに帰属させ、強いストレスを感じる者がいた。そのような帰属が行われる背景にあったのが、男性はふつう家事が得意でないという理解である。例えば、これまで自分一人で家事をしたことがほとんどないという40代の息子介護者は、親の世話に時間と体力をとられ、家の中が散らかったままで、食事もある合いのものですませてばかりであることに苛立ちを覚えていた。

男は無力だなあって。……女の人だったらこんな（疲れている）ときだって、有り合わせのもので工夫してそれなりのもの（＝料理）をつくれるでしょうし。

彼が状況を悲観的に見るとき、そこには、男性はふつう家事が得意でないという理解と、そうし

たふつうの男性への同一化がある。しかし、要介護の親を看ながら家事をこなすのは、誰にとっても大変なことだろう。親の世話に追われることで時間的・体力的な余裕がなくなり、家のことが思うようにできなくなることは、女性の場合でもありうるはずだ。だが彼は、自分が男だからうまくいかないのだと、逆に言えば、女であればもっとうまくいくはずなのに、という思いを強くしていた。

彼の状況認識の前提には、家事能力に関する二分法的な性差の理解がある。男性はふつう家事が得意でないという男性性の裏にあるのは、女性はふつう家事が得意であるという信念である。この二分法的な理解によって、彼は現在の状況を「男ゆえの困難」として認識することが可能になっている。家事能力をめぐる男性性と女性性は、彼が現在の状況をそのように説明可能(accountable)にするための前提である(West and Zimmerman 1987)。

ただし、男性はふつう家事が得意でないという理解は、常に悲観的な状況認識をもたらすわけではない。逆にそれによって、家事ができないことを問題に感じずにすむ場合もある。認知症の父親と二人暮らしの40代の息子介護者は、さきの息子と同年代であり、家のなかで散らかったまま掃除も行き届いていない点でも同じだったが、状況に対する見方は対照的だった。

父親を介護していた母親が急逝することで介護者になった彼は、食事や洗濯も含め、自分の世話をすべて母親にしてもらっていたため、家事経験がほとんどないまま父親を介護することになった。だが彼は、自分が家事をできていないことも、それゆえに自分と父親の生活環境が良くないことも、ほとんど問題に感じていない。その理由は、彼が男性だからである。彼もまた他の息子介護者と同様、男性はふつう家事が得意でないという理解を共有しており、それゆえに彼は、できない方がふつうなのだと、家事能力の不足を楽観的に見ていた。

(掃除は) 行き届かないところもありますけども、ほけた父親とふたりきりの男所帯でしょ、母親が生きてたときみたいにはいかなくても、

まあしゃあないなと思うておるんですわ。

彼が楽観的でいられるのは、家事が得意でないことがふつうの性＝男性に同一化しているからである。家事能力についての二分法的な性差の理解のもと、家事ができていないという自覚が問題意識に繋がらずにすむのは男性のアドバンテージであり、同じことは女性には起こりがたい。なぜなら、さきの息子の例に見たように、男性はふつう家事が得意でないという男性性の裏には、女性は家事がうまくできるものという理解(女性性)があるからである。この規範的な理解が共有されているとき、女性が自分に家事能力が不足していることを肯定的に見ることは容易ではない。家事能力に対する自己評価の基準を切り下げ、実際にそれが不足していても自己肯定が可能になるように状況を説明可能にすることが「ゆるされて」いるのは、男性だけなのである。

男性はふつう家事が得意でないという理解が、家事の遂行に対する息子介護者の自己評価にどのように作用するかは一律ではない。その理解をどのように用いるかによって、家事ができていないという自覚は、危機意識にも現状容認にも転がりうる。重要なことは、上のどちらの息子介護者も、家事能力の性差については同じ理解をしているということだ。つまり、状況認識の違いを生じさせているのは、ジェンダー観そのものの違いではなく、ジェンダー観の参照のしかたの違いなのである。

3. 息子介護者の見方②——親の老いの認識

被介護者である親をどう見るかもまた、息子介護者の経験を理解する上で重要な、彼らの状況認識である。そしてまた、親の老いをどこで・どのように感じ、その親にどう関わろうとするのかにおいても、男性性や女性性がその構成要素(components)になっている。

それを理解する前提として、先行研究から報告されている息子によるケアの特徴を紹介しておきたい。国内外の調査研究によれば、息子は、娘に比べて親の老いに楽観的であることが示唆されて

いる。例えば、親のケアのしかたにおける娘と息子の違いを検討したサラ・マシューズは、息子は娘よりも親の自立性を強調する傾向があると指摘する (Matthews 2002)。マシューズによれば、娘は自分が関与することで親の生活が維持されることを目指す。だから、親が年をとってきたとき、娘は親の生活に注意を払い、親が現在何をできないか／できなくなったかを見定め、必要な支援が提供されるように早めに手を打とうとする。

それに対して息子は、自分の関与なしで親の生活が成り立つことを目指す傾向がある、とマシューズはいう。息子は娘に比べ、親が自己充足的 (self-sufficient) であることを強調する。息子の目に映るのは、親ができなくなったことよりも、まだできていることである。そして、親はまだ一人でもやっていけると判断する傾向があるし、また、親に対して一人でやっていこうという気概を期待しやすい。

息子のこうした傾向は、日本の息子介護者を対象にした私の調査でも確認された (平山 2014)。彼らのなかには、親への手助けを最小限に留めようとする者が目立っていた。彼らによれば、その理由は、親をできる限り自立状態に置くためである。手助けをしなければ、親は自分に残された身体機能・認知機能を駆使して、一人でやらなければいけない。そうすることで体と頭が鍛えられ、自立状態の維持に繋がるから、というのが彼らの説明である。

男性性や女性性が息子の親への関わり方に作用するのは、息子がこのように親の自立状態の維持をケア目標に掲げるときである。男性性と女性性は、父親と母親に異なる自立状態を観念させるからである。

性別分業構造のもとで、女性である母親に期待されるのは家族をケアする役割である。したがって、母親の自立状態とはそうしたケア役割を遂行できることであり、それができなくなることをもって母親の衰えが認識される。実際、面接調査に参加した息子介護者が母親の老いを語る時に言及していたのは、以前のように家事ができなくなったことだった。

それがすっかり (家事を) やれなくなっちゃって。前は (母は) 本当にきちんとした人だったんです。家に来る人にも褒められてね。それがここまで崩れてしまうのかっていうギャップ。

対照的に、父親の老いを語るとき、息子が言及したのは父親の過去の栄光である。つまり、職業人として、あるいは地域活動の担い手として、父親がどのように立派にそれをこなしていたかということだった。他方、父親に家事の遂行能力がどの程度あるか／残っているかを語る息子は皆無だった。家事の担い手となることを期待されておらず、実際に自分が中心となって家事を担ってきたことのない父親については、その自立状態のイメージに家族の世話ができることは含まれていないのである。

だとすれば、親の自立状態の維持を望む息子に介護されるとき、肩身の狭い思いをするのは父親よりも母親だろう。家事をはじめとする日常生活がおぼつかなくなることで老いを認知され、それゆえに機能維持のために息子に発破をかけられやすいのは母親だからである。もちろん父親も、加齢とともに家事に必要な機能が衰えてくる。しかし、それまでの人生、母親をはじめとする女性の家事の受益者としてのみ生きてきた父親については、家事ができないこと、家族に世話されることは常態であり、その点に変化はない。その意味で、高齢期における自立状態の判断基準は、父親よりも母親に対して厳しく設定されている。性別分業構造は、被介護者である親のあいだにもジェンダー非対称性をもたらし、父親は家事能力をめぐる男性性と女性性からアドバンテージを享受できるのである。

4. 息子介護者への見方

——周囲は彼らをどのように評価するか

男性性と女性性は、周囲の人々による息子介護者の見方も構成する。まず指摘しておきたいのは、男性である息子介護者は、女性が介護している場合に比べ、周囲から気かけられやすいというこ

とだ。ケア役割がいまだに女性性と結び付いた現状で、男性が家族を介護する姿は異色であり目を引くが、女性の介護者は「ありふれている」からである (e.g. Davidson, Arber, and Ginn 2000)。近年、周囲に助けを求められない男性介護者の孤立が取り上げられているが、周囲の注意が相対的に集まりにくいという意味で孤立しやすいのは女性介護者である。事実、介護の過程での社会関係の縮減は、女性の方が大きいことを示唆する実証知見もある (Miller and Montgomery 1990)。男性介護者の「男ゆえの困難」の裏で見えにくくなっているのは、「ありふれている」からこそ取り立てて注意を向けられない女性介護者の「女ゆえの困難」である。

ただし、男性介護者に向けられる周囲の目は、必ずしも肯定的なものとは限らない。面接調査のなかで、周囲からの否定的な反応に特に言及していたのは、単身で非正規・無職の息子介護者である。母親の介護のために現在はアルバイトで働いている単身の息子は、彼に「親孝行」を説く近所の女性に辟易していた。

まだ若いんだから、ちゃんとお勤めしてねー、お嫁さんもらって (お母さんを) 安心させてあげてねー、それがいちばんの親孝行になるんだからねー、って。……氣にかけてくれると思って良く考えられればいいんですけど、うっさいわ！ っていうのが、正直なあれで。

彼に向けられる周囲の人の態度は、男性性を前提としたものである。日本では相変わらず、フルタイムで働き、結婚して妻子を養う稼得者としての男性が「標準」となっている (田中 2009)。彼はそこから逸脱しており、だからこそ、その「標準」を達成するよう周囲から勧められていた。

端的に言って、「親孝行」はジェンダー化されている。息子が男性としての「標準」を達成していない限り、彼らが親の世話に熱心であっても (あるいは、熱心であるからこそ) 周囲からの評価は否定的なものになる。この男性も含め、「標準」から外れた息子介護者のなかには、そうした否定的

評価を避けるため、他人との接触をあえて避けている者もいた。それは結局のところ自身の社会関係を断絶させることを意味するのだが、彼らはそうした自発的孤立によって規範的な男性性のもとで評価されることからの自衛を図っていた。

逆に、息子介護者が既に「標準」を達成していれば、周囲の評価は一転して高くなる。彼らは結婚し、妻子を養い、息子＝男性として「一人前」である上に、さらに親のケアにまで従事しているということで、ふつう以上に「親孝行」な男性と見なされる。実際、ケアマネジャーへの面接調査のなかで、「親思いの息子さん」として必ず好意的に評価されていたのは、大抵、フルタイムで働いている息子介護者である。さきの単身の息子が、同じように親を熱心に介護していても、地域の人々から「親孝行」していないかのように見られていたこととは対照的である。

「親思いの息子さん」という好意的評価は、この息子介護者が結婚していることにも由来している。親の介護を妻に任せてしまう旧来の息子たちに比べれば、妻がいるのに自分が主たる介護者になっている男性は、それだけで立派に見られるのだ。対照的に、息子介護者の妻への評価はしばしば低くなる。実際、あるケアマネジャーは、同居で親を介護する男性の妻に対して「一つ屋根の下にいるんだから、もう少し気にかけてあげても」と言い、そこには妻の態度への疑問がにじみ出ている。

念のために付け加えれば、彼の妻は介護に参加していないわけではないことが、息子本人へのインタビューからわかっている。例えば、母親に食事の介助をするのは息子だが、母親の分も含めて家族の食事を用意しているのはこの妻である。同様に、母親の着替えをしているのは息子だが、家族全員分の洗濯をしているのは、やはり妻である。こうした妻の炊事や洗濯がなければ、息子が行う介助——これが一般的に介護として観念されるものである——が成り立たないという意味で、妻は介護に不可欠な基礎部分を担っている (平山 2014)。にもかかわらず、妻は、同居の義理の親の主介護者になっていないこと、そしてその役割

を働く夫に「任せて」いることをもって、低い評価を受けているのだ。

働く既婚の息子介護者に集まる称賛は、就労と介護の両立におけるジェンダー非対称性を示している。性別分業構造のもとで、ケアを要する家族がいる状況で女性が働けば、彼女たちはしばしば厳しい目にさらされる（「家族を放りっぱなしで仕事ばかりして……」）。つまり、「女性のしごと」とされるケア役割を担わない場合はもちろん、それを担っている場合でさえ、女性が「男性のしごと」である就労役割を担うことには否定的な評価がつきまとう。だが、上のケアマネジャーの評価に表れているように、就労する男性が介護を担う場合、称賛されることはあっても非難されることはない。男性が「男性のしごと」を担ってさえいれば、「女性のしごと」を担うことに周囲は好意的なのである。このような男性への好意的反応は、「イクメン」「ケアメン」言説が広がりを見せる現在、ますます強まるだろう。

もちろん、アルバイトの息子介護者の例のように、規範的な男性性のもとで「標準」とされるフルタイムの仕事に就いていない男性が、否定的評価にさらされることはある。だがこれは、ケアという「女性のしごと」をしていない女性に対する否定的評価と同じであり、自身の性にあてがわれた役割を担わないことへの反応という意味ではジェンダー対称的である。ここで問題としているのは、自身の性にあてがわれた役割に加えて、そうではない役割を担うことへの周囲の反応であり、そこには明らかな非対称性がある。

もう一つ、働く既婚の息子介護者への称賛が示すのは、親世代における介護責任のジェンダー非対称性である。息子介護者の妻に対する否定的な反応が示唆するように、義理の親への介護に（どの程度）関わっているかは、女性にとっていまだに問題になっている。だが、男性にとって義理の親へのケア責任が問題となることはほとんどない。実際、息子介護者への面接調査でも、「妻には自分の親の介護があるので」と、自分の親を自分で介護している理由づけとして義理の親の介護に触れた者はいたものの、その舅姑の介護を自分が関

わるべき介護かどうかという観点から語った息子は皆無だった。つまり、「向こうの親の世話、本当に何もしなくていいのだろうか」という問いにさらされ続けるのは女性だけなのである。

義理の親へのケア責任におけるジェンダー非対称性は、家族介護者の続柄別割合（図表-1）にも表れている。家族介護者に占める義理の息子の割合は、一貫してゼロに近い状態である。これは義理の娘の割合が、減っているとはいえ依然として実の息子よりも多いこととは対照的である。ここから推し量るに、女性が義理の娘として同居の舅姑の介護をしながら、娘として別居の実親の介護に当たる、という事態はありえるが、男性が義理の親の主介護者になることはほとんどないと考えられる。

こうしたジェンダー不均衡が残っているにもかかわらず、実子介護の趨勢が強調されるなかで、子世代の介護責任はジェンダー平等になりつつあるようにしばしば語られる。これは、老親介護に関する日本の文脈にも原因がある。日本では長らく義理の娘による介護が一般的だったため、主介護者における義理の娘の減少と実の息子の増加をもって、介護責任におけるジェンダー平等性が主張されがちなのだ。

しかし本来、義理の娘と比較すべきなのは、実の息子ではなく義理の息子である。事実、国外の研究では、親のケア責任の夫婦内での分配を検討するとき、妻と夫がそれぞれの義理の親に対してどの程度ケアを提供しているかにも着目している（e.g. Szinovacz and Davey 2008）。義理の娘としての妻と、義理の息子としての夫を日本でも同様に比較してみれば、親のケア責任におけるジェンダー不均衡は明らかだろう。

実子介護の趨勢は、必ずしも義理の娘の介護責任を否定して進行してきたわけではない。息子介護者の増加という家族介護の変化が強調されるなかで曖昧にされているのは、家族のなかでの女性の責任の変わらなさと、その立場の難しさである。そして、その構成要素となっているのが性別分業を前提とした男性性と女性性である。そうした男性性と女性性を参照しながら行われる息子介護者

への評価が、老親介護の領域で、男性優位のジェンダー関係を維持しているのである。

5. おわりに——解釈実践を分析する意義

本稿の目的は、息子介護者による状況の見方と、息子介護者に対する周囲の見方のなかに、どのような男性性・女性性が、どのように参照されているかを検討することにあった。本稿のなかで例証したように、男性性は、その参照のしかたしだい息子介護者にアドバンテージをもたらす。本稿はそうしたアドバンテージに焦点を当てることで、一見すると性別分業構造から遠い位置にあるように思われる息子介護のただなかで、ケア責任をめぐるジェンダー不均衡がいかに再生産されているかを考察した。

この考察から示唆されているのは、息子介護者の増加は、必ずしも性別分業構造を揺るがすものにはなりえないということだ。もちろん、介護役割を担う男性の増加は、ケア労働の平等分配という意味では望ましい変化ではある。だが、本稿を通して見たように、息子介護者による状況理解のしかたも親への関わり方も、そして、息子介護者に対する評価のしかたも、ジェンダー化された家族役割を前提としてなされている。これは、就労を男性の責任に、ケアを女性の責任に位置付ける構造に則った解釈実践であり、個人によるこうした実践こそが性別分業構造を再生産していることは、明らかにされている（山根 2010）。事実、働く既婚の息子介護者に対する反応を通して見いだされたように、ケア役割を担うことを当然とされつつ、その貢献を評価もされないという女性の抑圧的経験は、実子介護の趨勢の強調の陰で、より巧妙に隠蔽されている。だとすれば次なる問いは、息子介護者とそれを取り巻く人々の実践が構造の変動に繋がる契機はどこにあるのか、ということだろう³⁾。

念のために付け加えておくと、息子介護者にもたらされるアドバンテージを考えることは、親の介護は男性にとっては楽なのだと主張するためではない。介護役割を担うことで、男性もさまざま

な心理的・身体的負担や社会的困難を強いられていることは事実である。だが一方で、息子介護者のストレスを増大させるのも緩衝するのも、状況認識における男性性の参照のしかたであることは、家事の遂行に対する自己評価の検討から明らかである。したがって、男性性や女性性を用いた解釈実践の分析は、家族介護を通して性別分業構造の再生産と変動がどのように起こりうるかを明らかにするためだけでなく、介護者個人の負担や困難が生じるメカニズムを探るためにも必要なのである。家族介護のミクロのプロセスを分析する意義はここにある。

注

- 1) この「伝統」は歴史が浅く、親の介護を担うのが息子の妻になったのは明治から戦中の間である（春日井 2004）。それ以前、例えば近世の武家では、親の介護は息子自身の務めとされていた（柳谷 2011）。
- 2) 面接調査は、関東および近畿の都市部と地方部で実施した。対象者の募集は地域の医療機関や居宅介護支援事業所を通じて行った。この調査における息子介護者とは、協力機関の職員が、親の主介護者になっていると認めた息子のことである。息子自身による名乗りを採用しなかったのは、「自称息子介護者」のなかに実際には妻に介護をさせている者が多数含まれていたためである。なお、一部の息子介護者については、その親の担当ケアマネジャーにも面接を行った。
- 3) 性別分業構造を攪乱する可能性をもつ息子介護者の実践については、平山（2017）で考察している。

文献

- 落合恵美子, 2004, 『21世紀家族へ——家族の戦後体制の見かた・超えかた（第3版）』有斐閣。
- 春日キスヨ, 2013, 「男性介護者の増大と家族主義福祉レジームのパラドクス」庄司洋子編『親密性の福祉社会学——ケアが織りなす関係』東京大学出版会, 165-184。
- 春日井典子, 2004, 『介護ライフスタイルの社会学』世界思想社。
- 全国国民健康保険診療施設協議会, 2011, 『男性介護者に対する支援のあり方に関する調査研究事業報告書』。
- , 2012, 『家族介護者の実態と支援方策に関する調査研究事業』。
- 田中俊之, 2009, 『男性学の新展開』青弓社。
- 中西泰子, 2009, 『若者の介護意識——親子関係とジェンダー不均衡』勁草書房。
- 平山亮, 2014, 『迫りくる「息子介護」の時代——28人の現場から』光文社新書。
- , 2017, 『介護する息子たち——男性性の死角と

- ケアのジェンダー分析』勁草書房。
- 柳谷慶子, 2011, 『江戸時代の老いと看取り』山川出版社。
- 山根純佳, 2010, 『なぜ女性はケア労働をするのか——性別分業の再生産を超えて』勁草書房。
- Calasanti, Toni, 2003, "Masculinities and Care Work in Old Age," Sara Arber, Kate Davidson, and Jay Ginn eds., *Gender and Ageing: Changing Roles and Relationships*, Maidenhead, England: Open University Press, 15-30.
- Davidson, Kate, Sara Arber, and Jay Ginn, 2000, "Gendered Meaning of Care Work within Late Life Marital Relationships," *Canadian Journal on Aging*, 19 (4) : 536-553.
- Matthews, Sarah H., 2002, "Brothers and Parent Care: An Explanation for Sons' Underrepresentation," Betty J. Kramer and Edward H. Thompson Jr. eds., *Men as Caregivers: Theory, Research, and Service Implications*, New York: Springer, 234-249.
- Miller, Baila, and Andrew Montgomery, 1990, "Family Caregivers and Limitations in Social Activities," *Research on Aging*, 12 (1) : 72-93.
- Szinovacz, Maximiliane E. and Adam Davey, 2008, "The Division of Parent Care between Spouses," *Aging & Society*, 28 (4) : 571-597.
- West, Candace and Don H. Zimmerman, 1987, "Doing Gender," *Gender & Society*, 1 (2) : 125-151.

ひらやま・りょう 東京都健康長寿医療センター研究所 福祉と生活ケア研究チーム 研究員。主な著書に『介護する息子たち——男性性の死角とケアのジェンダー分析』（勁草書房, 2017）。ライフコースと家族の社会学専攻。(ryhrym@tmig.or.jp)